

浜松市立看護専門学校

令和7年度（令和8年度入学生）

一般入学試験（1期）

国 語

《 注 意 事 項 》

- 1 試験監督の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 2 解答用紙には受験番号と氏名を必ず記入してください。
また、受験番号を直下のマーク欄にマークしてください。
- 3 解答の際は、各問題で選んだ解答番号をマークしてください。
- 4 試験中に問題冊子の落丁・乱丁に気づいた場合は、手を挙げて、試験監督に知らせてください。
- 5 試験中の途中退室は原則として認めません。
ただし、気分が悪くなった場合やトイレへ行きたくなった場合は、手を挙げて、試験監督の指示に従ってください。
- 6 問題冊子及び解答用紙の室外への持ち出しは禁止します。
- 7 試験終了後、問題冊子及び解答用紙はすべて回収します。

第1問 次の文章は、河本英夫『哲学の練習問題』（講談社学術文庫2018）からの一文です。本文をよく読んで、以下の問いに答えなさい。

浦島太郎は、助けたカメに連れられて竜宮城に行き、この上ない極楽の日々を送る。この物語は、日本各地の民話のなかで語られていて、さまざまなヴァリエーションがある。『日本書紀』、『丹後国風土記』、『万葉集』に記載されており、一般に広まっているのは『御伽草子』の記述による。ここでは浦島は、玉手箱の煙で鶴になり、助けたカメとともに鶴亀となって万年の長寿を生きる話になっている。これを小説家の太宰治が読み替えて、浦島を俗世間の風流人だとし、世の批評を煩わしく思っている男の話にした。批評のない本当の風流の世界はないものかという希望が、男にはある。これを実現しているのが竜宮城である。竜宮城に着くと長い廊下がある。その廊下を歩くと足がヌメヌメする。よく見るとその廊下は、びっしりと並んだ魚でできている。魚はさぞ痛いのだろうと浦島がカメに言うと、水の中では体重がほとんどないも同然なので、そんな心配はいらないとカメは答える。およそ俗世の風流とは異質な経験をして、浦島は故郷に帰って来る。

こうした物語には、いくつもの謎が含まれている。そこでまず問いを立てることから始めよう。ともかく最初はなんでもよいので、問いを立ててみるのである。浦島は長時間海に潜ることはできないはずであり、スキューバもなくどうして海のなかにいられたのか、というような問いでもよい。㉠ ただ問いは、立てた途端に終わっているようなものほど、経験にとつての価値は低い。㉡ 人間が海のなかに潜ったままでいられるのは、フィクションだからだ。㉢ 立てた途端に終わっている問いは、本当は問いではない。㉣ この延長上で、浦島は実は人魚で、地上では仮の姿で暮らしていたが、浦島自身は人間になる手前のエラ呼吸もできる動物だったのだ、といった設定をすることもできる。㉤ しかし、これらはフィクションにフィクションを重ね描いているだけである。

しかも、どうみても取って付けたような作り話である。それは特定の事柄だけの説明にしかなっていないからである。こういう理由付けを、「アドホックな仮説」もしくは「その場しのぎの仮説」という。(一)説明がどんどん細っていく場合には深追いはしない。これは問いを立てるさいの基本である。説明が細るさいには、問いの設定が狭過ぎたからだであつさりとその問いを脇に置くほうがよい。実は狭い問いに「コウタイしてしまって、どうにも前に進めなくなってしまう人はとても多い。まじめな分だけ簡単には自分の問いをあつさり放棄することができず、そのことを他者から説明されても、容易には理解できない。

そこで浦島伝説を再度考え直してみる。この伝説の童話や絵物語になっている骨格は、助けるという善行は、やがて報われるという物語である。だが、善行を行えば報われるというタイプの道徳を込めたお話としては、どうも(二)剰余が大き過ぎる。カメを助けたお礼に、楽しい日々を送ったまではよい。しかし、楽しい日々もいずれは終わり、元の生活に戻らなければならない。楽しい日々は、やがて終わるから楽しいのである。楽しい日々を送って、期

限がくれば見送りを受け、この上ない一生の思い出を抱きながら、それでも思いを断ち切つて日常に帰っていく。仮にそうであれば、ごくありふれた場面である。だがこの物語のややこしいところは、帰り際に「開けてはいけないお土産」を渡されることである。開けてはいけないお土産とはなんなのか。これは簡単には終わりそうにない問いである。

通常お土産に、開けてはいけないものを渡したりはしない。バレンタインデーに開けてはいけないとただし書きを付けて、チョコレートを渡したりするだろうか。仮に本気で開けてはいけないお土産を渡していたのだとすると、どこかでこの行為には恨みや悪意がこもっている。普通に考えれば、浦島太郎は、竜宮城の生活でなにか恨みを買うようなことをしていたことになる。独りだけ身勝手に極楽の日々を送り、独りだけルンルン気分(B)に浸っていたか、あるいはカヌを助けたことぐらいで、気分よく毎日を送り過ぎて警告を寄せられたかの、いずれかである。

この場合、楽しかったのは浦島だけで、竜宮城のスタッフは途中からは内心「早く帰れ」と思っていたことになる。もうそろそろ帰らないかと思っているのに、それに気づかないでずるずる居座るものだから、最後には開けてはいけないお土産をもらうに至ったというのが実情だったのか。だが、この説明は、状況を にし過ぎている。 であること自体は、必ずしもダメだというわけではないが、 になってしまう理由が、事柄が小さ過ぎることによる場合には、その物語を通して聞き手、読み手に届くものが少なくなり過ぎる。

開けてはいけないと言われて箱や包みを渡されれば、いずれ開けてしまうのが人情である。ここでの選択肢は二つである。乙姫は、やがて開けることを見込んで渡していた、あるいはやがて開けてしまってもやむをえないというのが一つの選択肢である。実際には、この選択肢に沿って、浦島太郎は開けてはいけないお土産を開けてしまう。もう一つの選択肢は、開けてはいけないと本気で思っており、そこに(3)十分な理由がある場合である。

第一の選択肢は、ごく普通に見られる人間の本性や業のようなものである。開けてはいけないと言われれば、まず開けてしまう。人間にとつての開けてはいけない箱の典型が「パンドラの箱」と呼ばれるものである。ギリシア神話によれば、プロメテウスが天上の火を盗んで、人間にそれを与えた。そのことに怒ったゼウスが、復讐のために絶世の美女パンドラを創り、やがてパンドラはプロメテウスの弟であるエピメテウスと結ばれる。そのときパンドラはすべての禍(わづらひ)を閉じ込めた箱を持参して地上に降りてきたのである。そして、好奇心からパンドラはこの箱を開けてしまい、すべての禍が飛び散ってしまう。パンドラは急いで蓋をしたので、ただ一つのもが箱のなかに残った。それが「希望」である。これが後世になると物語の作り変えが進み、箱のなかにはいつさいの良い物あるいは善い物が入っていたが、箱を開けたためにそれらが雲散霧消し、箱のなかにはきさやかな「希望」だけが残ったというようになる。このとき希望の(4)意味合いが変化していることに注意を向けよう。

これほど大がかりな箱ではないが、浦島太郎が開けた玉手箱からも煙が立ち昇り、その煙を浴びると髪も髭(ひげ)も真っ白になってしまう。一挙に年老いて(6)ロウキヨウに入ってしまう

のである。箱が善意で送られたものなら、この極端な老化を押しとどめるための工夫が玉手箱だったことになる。老化はあるとき突然に一挙に進む。成人は一年一年歳を取るのではない。10年、15年とまったく歳を取らない。しばらくの間は、いつまでも若々しさを維持しているのが普通である。生体システムは自己維持のための補償機構を何重にも備えており、そのため少々の加齢では歳は取らない。ところが小さな病気や体調不良をきっかけにして、システムそのものの自己維持の仕組みが変わってしまうと、一挙に不連続に老いてしまう。この不連続な老いを先送りする装置が、玉手箱だったことになる。

だがもう少しうがった見方をしてみよう。もっと記憶に働きかけるような仕組みを考えてみる。楽しい日々、生涯における黄金時代というものは、多くの人にある。誰にとっても人生で最も楽しかった日々はある。ところがその黄金時代を、後の人生のなかで機会があるごとに振り返り、「あの時は楽しかった」という追憶の言葉を繰り返しがちになる。あまりにも楽しい時期があれば、多くの場合、その追憶のなかで、後の人生を送ってしまう。これはごくありふれたことである。イタリアのヴェネツィアに行ったことのある人は、飲めばヴェネツィアと口にし、かつて演劇をやっていた普通のサラリーマンになった人は、事あるごとに一度きりの「主演」を語りたがるというのは、ごく普通のことである。いずれも過去に生きているのである。

ついつい過去に生きてしまうほどの思い出をもつ人は、リスタートやリセットのためのなんらかの区切りを必要とする。誰であれ、過去をすべて捨て去ることはできない。だが、リスタートするためには、カッコに入れてしまわなければならない過去がある。比類なく楽しかった日々もそうである。玉手箱は、^⑤過去をカッコ入れするための善意の道具立てだったと考えることができる。だが多くの場合、再出発は実行されず、ひとたびしまい込んだ洋服を取り出すように、その箱を開けてしまうのである。これは最もオーソドックスな解釈のように思える。竜宮城が楽しければ楽しいほど、本来そこでの日々をカッコ入れしなければならない。だが、人間の本性上それを開けてしまうのである。そして、そのことを百も承知で、乙姫は開けてはいけないお土産を渡すのである。過去をカッコに入れるための装置、それが玉手箱だったことになる。

(中略)

玉手箱の謎は、そう複雑なものではないが、にもかかわらず深さのある問いを^⑥ゴウドウするところがある。この深さは発見されるものであって、それに応じて自分自身の課題を見いだすことができるようになっている。それが深さの意味でもある。見いだしてしまった問いによって自分の経験の仕方がいくぶんかでも変化すれば、それは良い発見を行ったのである。

問一 傍線部〈a〉～〈c〉の漢字と同じ漢字を含むものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈a〉 コウダイ
- ① 海亀のコウラの取引を禁じる
 - ② 身柄を一時的にコウソクする
 - ③ 他人とのコウリエウを避ける
 - ④ テツコウ業には石炭が必要だ
 - ⑤ 立場をキョウコウに主張する

- 〈b〉 ロウキョウ
- ① 久しぶりにコキョウに帰った
 - ② 新たな学説にキョウミを持つ
 - ③ 彼はキョウジユの職に就いた
 - ④ コツキョウで検問を実施する
 - ⑤ 各企業がキョウゴウする商品

- 〈c〉 エウドウ
- ① ドウミヤクに血液が流れる
 - ② 彼の意見にドウチョウした
 - ③ 会社経営がキドウに乗った
 - ④ ドウクツの中は気温が低い
 - ⑤ 電子機器をドウニユウした

問二 漢字の読みをひらがなで書いたとき、本文中傍線部〈A〉・〈B〉の傍線部の読みと最初の一文字が共通するものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈A〉 煩わしく
- ① 討つ
 - ② 図る
 - ③ 判る
 - ④ 診る
 - ⑤ 屈む

- 〈B〉 溲って
- ① 控える
 - ② 繋がる
 - ③ 強いる
 - ④ 応える
 - ⑤ 乱れる

問三 本文では次の一文が欠落している。㉠～㉥のうち、この一文が入るのに最も適切な位置を、①～⑤より一つ選びなさい。

これで終わりである。

- ① ㉠
- ② ㉡
- ③ ㉢
- ④ ㉣
- ⑤ ㉤

問四 傍線部(1)「説明がどんどん細っていく場合には深追いはしない」とあるが、そのようにする理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 説明のために新しい問いを立てる必要があるから。
- ② 問いの設定が狭いことを自分で理解できないから。
- ③ 問いの答えを考えることが大変になっていくから。
- ④ 問いを立てて得られる見識の内容が薄くなるから。
- ⑤ 問いに対する答えがただちに得られてしまうから。

問五 傍線部(2)「剰余が大き過ぎる」とあるが、筆者がそのように述べた理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① カマを助けたお礼としては、浦島が竜宮城で受け取ったお返しが大き過ぎるから。
- ② 楽しい日々はいずれ終わり、元の生活に戻らなければならないことが分かるから。
- ③ 善行が報われた話としては、竜宮城についての記述が必要以上に細か過ぎるから。
- ④ 善行を行って報われた後に、玉手箱を開けるという重大な展開が続いているから。
- ⑤ 開けてはいけないお土産を渡されることで、楽しかった日々が台無しになるから。

問六 三箇所にある空欄 X にはすべて同じ語が入る。その語として最も適切なものを、

①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 特殊
- ② 曖昧
- ③ 冗長
- ④ 高尚
- ⑤ 鮮烈

問七 傍線部(3)「十分な理由」とあるが、その理由として最も適切なものを、①～⑤より

一つ選びなさい。

- ① 楽しいのは浦島だけで、竜宮城の側は早く帰ってほしかったため。
- ② 一挙に不連続に老いてしまうのを、押しとどめて先送りするため。
- ③ 開けても仕方ないとしても、開けないほうがよいものであるため。
- ④ 竜宮城に残っていれば、ずっと若々しさを維持していられるため。
- ⑤ 開けてはいけないと言え、逆に開けてしまうと知っていたため。

問八 傍線部(4)「意味合いが変化している」とあるが、その変化の説明として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 前の解釈では希望が良い物・善い物のうちの一つとなっていたのが、後の解釈では希望が禍のうちの一つへと変わっている。
- ② 前の解釈では禍が飛び散ったあとに残った希望が、後の解釈では一切の良い物・善い物が無くなった後に残ったように変わっている。
- ③ 前の解釈では禍に対抗するための希望だったが、後の解釈では良い物・善い物を取り戻すための希望へと変わっている。
- ④ 前の解釈では絶望的な世界の中での希望であったのが、後の解釈では理想的な世界の中での希望へと変わっている。
- ⑤ 前の解釈では開けると禍が飛び散る箱であったのが、後の解釈では開けると良い物・善い物が飛び去る箱へと変わっている。

問九 傍線部(5)「過去をカッコ入れする」とあるが、その説明として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 自分の記憶に働きかけて、過去の黄金時代のことを完全に捨て去って忘れようとする。
- ② 現在の自分に比べて過去の記憶が辛いものであるので、一旦は忘れておくようにすること。
- ③ 事あるごとに過去のことを振り返るために、過去の記憶を現在の自分と切り離しておくこと。
- ④ 生涯における黄金時代の記憶を大切なものとして、いつまでも大事にしまいこんでおくこと。
- ⑤ 現在の自分を生きるために、過去の記憶に区切りをつけて普段は意識しないようにすること。

問十 本文の内容と合致していないものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 太宰治が読み替えた話においては、浦島太郎は俗世間での風流人であり、俗世間とは異質な童宮城での風流にとまどいを感じている。
- ② 自分の立てた問いに固執してしまうと、その問いを放棄することができず、他人から指摘されても思考の行きつまりに気付きにくくなる。
- ③ 相手に対する恨みや悪意がない場合、ブレンドインデーに「開けてはいけない」とただし書きを付けたチョコレートを渡すことは考えにくい。
- ④ 昔に演劇をやっていて普通のサラリーマンになった人が、かつて自分が主演を演じた演劇について語りたがるというのは、よくある話である。
- ⑤ 問いを立てることで自分自身の課題を見だし、それによって自分の経験の仕方が変化するならば、問いを立てたことの価値がそこにある。

第2問 次の文章は、青山美智子『お探し物は図書室まで』（ポプラ文庫2023）からの一文です。本文をよく読んで、以下の問いに答えなさい。

いつか、一緒に店をやりたいね。

そんな話をくたくまにすることもある。でもその「いつか」は、定年後とか、宝くじで一億円当たったらとか、そんな夢物語だ。僕がかなり本気で今それを望んでいるとは、比奈も思っていないだろう。

僕は定年まであと何年あるんだっけ。そのときになって、店を持つ資金や情熱や体力が残っているだろうか。

今日は、比奈に誘われて「鉱物とあそぶ」という小規模な講習会に参加することになった。比奈の家の近所の小学校に、コミュニティハウスという施設があって、そこでイベントや教室が（こ）カイサイされているのだという。比奈の通っていた小学校ではないらしく、よく見つけたねと言ったら、彼女は言った。

「ネットショップを自分で作ってみようと思って、パソコン教室を探したらここでやったの。今、通ってるんだ。ほぼマンツーマンで二時間しつかり教えてくれて二千円だよ、すごいよ、コミュニティハウスって。いろんなイベントとかサークルとかあるし」

シーグラスのアクセサリを作るだけでは飽き足らず、売ることを考え始めたのだ。比奈は週三日、事務のバイトをしている。実家住まいで生活費の心配もないし、アクセサリ作りやネットショップにかける時間はたっぷりある。（僕とは違って。

……だめだ、卑屈になっている。僕はふるふると頭を振った。

僕は比奈に連れられてコミュニティハウスの白い建物に入り、受付に置いてある入館表に名前と目的、入館時間を書いた。訪問者は午前中に十人ほどいたようで、利用場所には集会室や和室の他に図書室も記されていた。そんなものもあるんだ。

講習会の場所は集会室Bで、集まったのはわずか四人だった。僕たちの他は年配の男性がふたり。これくらいコンパクトなほうが、こんな講習には合っているのかもしれない。

講師は、茂木先生という五十代の男性だった。最初に、簡単な自己紹介をしてくれた。普段、鋳物工場で働いている茂木先生は、趣味が高じて鉱物（こ）カントリー士の資格を取り、時間のあるときにはほとんどボランティアで講習会や採石イベントを開いているそうだ。

趣味が高じて、ボランティアで、か。誰にも迷惑をかけず喜ばれて、穏やかな気持ちで楽しめるんだろうな。

② そんな雑念の中でも、講習会はおもしろかった。どんな種類の鉱物があるのか。鉱物がどんな過程でできるのか。正しいループの使いかた。珍しい鉱物の標本も見せてくれた。

ひとりにひとつずつ、五センチぐらいの石が配られた。紫から黄色にグラデーションがついた縞模様しまのそれは、アルゼンチン産の螢石ほたるいしだと先生は言った。

「では、一緒に磨いていきましょう」

スポイトで水を垂らし、サンドペーパーで磨く。少し平らになったところで水洗いし、ペーパーの目の細かさを上げていく。

石の凹凸がなめらかになった蛍石は、縞模様がかつきりと鮮やかに浮かび上がってくる。楽しい。

むくむくと、雑貨屋の夢が⁽³⁾頭をもたげる。そらだ、こういう鉱物のコーナーも作って。専門の先生を呼んで、こぢんまりしたイベントをやるのもいい。

九十分の講習を終えると、比奈が言った。

「ねえ、私、先生と話してくるから、ちよっと待っていてくれる？ こういう鉱物でアクセ作ってみたいの。硬度のこととか、適した石とか、教えてもらいたい」

意欲的だ。ネットショップで頭がいつぱいの比奈を、邪魔する理由はない。

「うん。図書室があるみたいだから、本でも見てるよ。ゆっくり聞いてきな」

僕はそう言って、集会室を出た。

図書室はつきあたりにあった。

入口から中をのぞくと、思ったより広い。壁際にも中央にも、本棚がぎっしり並んでいた。利用者の姿はなく、カウンターの中で紺色のエプロンをかけた女の子が本のバーコードを打っている。

僕は手始めに入口から一番近い壁際の本棚を見た。小学校にくつついてる施設だから子ども向けが多いのかと思いきや、普通の図書館とく^(A)遜色なく品ぞろえが良くて驚いた。

アンティークの本を探す。工芸・美術の棚はすぐに見つかった。いくつかばらばらとめくつたあと僕は、店を開くことに関する本はないかと思われた。

そこに、紺色エプロンの女の子が通りかかった。本を三冊持っている。返却作業だろう。

「起業とか経営の本って、どんなのがありますか」

僕が訊ねると、女の子は大きな目をくりつと動かしだした。まだ十代じやないだろうか。

「えっと、えっと……。ビジネス書かな。でも、経営者の自伝とかも役に立つし」

ネームホルダーに「森永のぞみ」とある。けんめいに考えてくれる彼女に申し訳なくなつて、僕は「あ、大丈夫です」と片手を振った。のぞみちゃんは真っ赤な顔で言う。

「すみません。私、まだまだ司書の勉強中で。奥のレファレンスコーナーにベテランの司書がいますので、そちらどうぞ」

のぞみちゃんが手を向けたほうの天井に、「レファレンス」と書かれたプレートがつるぎられている。

わざわざ司書を置くなんて、小さいけどちゃんとした図書室だ。僕は奥に向かい、ついでてを越えたところのレファレンスコーナーを見てぎょっとした。

そこに座っていたのは、どてつもなく大きな女の人だった。

はちきれそうな体の上に、^(B)顎のない頭が載っている。ベージュのエプロンに、目の粗いアイボリーのカーディガン。肌も白く服も白く、「ゴーストバスターズ」に出てるマシエマロマンみたいだ。

僕はおすおすと近づいて行った。むっつりした養育のマシエマロマンはなにやら、小刻みにふるえている。具合でも悪いのかなと手元をのぞきこむと、カウンターの中で、なにか丸

いものにぶすぶすと針を刺しているのだった。

……………ストレス、たまってるのかなあ。

僕は話しかけていいものが迷い、引き返そうとした。するとマシエマロマンがぼつと顔を上げる。想定外に目が合って、僕は固まった。

「何をお探し？」

思いがけず、優しい声だった。びっくりした。ちっとも笑ってないのに、いつくしみに満ちていた。僕は吸い寄せられるようにふらふらと体を回けた。

何を探してるのかって……もてあましてる夢の置き場かもしれない。

マシエマロマンの胸に、ネームホルダーが提がっている。小町きゆり。小町さんっていらんだ。お団子頭には白い花のかんざしが挿きっていた。

「あの……起業の本とが、ありますか」。

きぎよう、と小町さんは繰り返した。

「起こす業ごうの、起業です」

そんなふうに言うと、ものすごくたいそうなことを考えているようで、⁽⁴⁾少しきまり悪くなった。僕は追ってリクエストする。

「あと、上手な会社の辞め方とか……」

どっちもできないくせに。業を起こすことも、今いる場所を手放すことも。

小町さんは、手元にあつたオレンジ色の紙箱の中に、針と玉を入れた。黒宮堂のハニートムというクッキーの箱だ。小さな頃、家の手伝いをするとお駄賃代わりにもらった記憶がある。

小町さんは蓋を閉じ、僕を見た。

「起業にも、いろいろあるよね。なにをしたいの」

「いつか、雑貨屋をやりたいんです。アンティークの」

「いつか」

小町さんはまた、そっだけ復唱した。フラットな言い方だったけど、僕はなんだか、⁽⁵⁾あわてて言い訳をしなければいけないような気持ちになった。

「いや、だって、すぐには会社辞められないし。店を開けるほどの莫大な資金をあつさり調達なんてできないし。そりゃ、いつかなんて言ってるうち、夢で終わっちゃうのかもしれないけど」

「……………夢で終わる、というか」

小町さんは、かくんと首を傾げる。

「いつかって言っている間は、夢は終わらないよ。美しい夢のまま、ずっと続く。かなわなくても、それもひとつの生き方だと私は思う。無計画な夢を抱くのも、悪いことじゃない。

日々を楽しくしてくれるからね」

⁽⁶⁾僕は言葉を失った。

「いつか」が夢を見続けるための呪文だとしたら、その夢を実現させるためには何を言えばいいんだろう。

「でも、夢の先を知りたいと思ったのなら、知るべきだ」

小町さんはすつと姿勢を正し、パソコンに向かった。キーボードの上で一秒手を止め、次の瞬間、指が見えないくらいのハイスピードでキーを打っていく。[X]を契かれて、僕はあぐりと口を開けてしまった。

最後に華麗な⁽⁶⁾シグザでリターンキーを押すと、プリンターから紙が出てくる。差し出されたその紙には、本のタイトルや著者名と、棚番号などが表になって印刷されていた。

『あなたにも店が開ける』『わたしのお店』『退職を考えたらやるべき七つのこと』。

リストの最後に、違和感のあるタイトルがあって僕は二度見した。

『英国王立園芸協会とたのしむ 植物のふしぎ』。

何か間違えたのかなと思い、僕はその長いタイトルを読みあげた。小さな声だけど、小町さんに聞こえていたはずだ。でも小町さんは黙って僕を見ている。

「植物のふしぎ？」

僕はもう一度、そこだけ復唱した。小町さんは「うん」と言い、かんぎしに手をやった。

「ちなみに、これはアカシアの花」

無表情でそう言われて、僕はなんて返事をしていいのか迷った。あたりさわりなく「素敵です」とほめると、小町さんはハニードームの箱に人差し指をあてる。

箱の蓋には、白い花が描かれている。そうなのか、これ、アカシアだったんだ。昔からよく目にするパッケージだったけど、花の名前まで意識したことがなかった。

「ハニードームの蜂蜜は、アカシアなんだよね」

ぼそりとそう言い、小町さんは大きな体を少し丸めてカウンター下の二段目の引き出しを開けた。

「どうぞ。あなたにはね、これ」

「え？」

軽く握られたクリームパンのような小町さんの手が伸びてくる。僕も思わず手を出すと、ふわっと何かを置かれた。

毛糸玉みたいな……猫だった。茶色い体に黒い縞。横たわって眠るキジトラ猫。

「え、これ、なんですか？」

「ふろく」

「え？」

「本の付録だよ」

付録……。あなたには、ってどういう意味だろう。猫好きに見えたのかな。なんで？

「これ、作るときに型紙が要らないのがすごくいいの。こうでなくちゃいけないっていうのが決まってないんだよね」

小町さんはハニードームの箱の蓋を開けた。再び玉と針を手に取り、ふすふすと刺しだす。⁽⁷⁾それ以上何も訊いてはいけないような雰囲気になって、僕は紙と猫を持って去ろうとした。

問一 傍線部〈a〉～〈c〉の漢字と同じ漢字を含むものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈a〉 カイサイ
- ① 舞台上でカツサイをあげる
 - ② 岩をフンサイする
 - ③ 公平にサイバンする
 - ④ 厳しくサイソクする
 - ⑤ 絵のサイノウがある

- 〈b〉 カンテイ
- ① 最初がカンジンだ
 - ② ブカンを読む
 - ③ カンペきな計画だ
 - ④ カントクの指示に従う
 - ⑤ 街をカンコウする

- 〈c〉 シグサ
- ① 経費をシシユツする
 - ② オンシに会いに行く
 - ③ シリヨクの検査をする
 - ④ レキシの勉強をする
 - ⑤ 社会にハウシする

問二 漢字の読みをひらがなで書いたとき、本文中傍線部〈A〉・〈B〉の傍線部の読みと最初の一文字が共通するものを、①～⑤よりそれぞれ一つ選びなさい。

- 〈A〉 遜色
- ① 慕う
 - ② 沿う
 - ③ 請う
 - ④ 集う
 - ⑤ 誓う

- 〈B〉 顎
- ① 脚
 - ② 腹
 - ③ 脇
 - ④ 膝
 - ⑤ 脛

問三 傍線部(1)「僕とは違って」とあるが、この表現から読み取れる「僕」の状況として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 比奈は時間的にも経済的にも余裕で過ごす環境にあるが、自分は責任ある生活を送っているという誇りから、優越感を感じている。
- ② 比奈の恵まれた境遇に対し引け目を感じ、比奈との差を埋めたいと考え、時間や金銭に余裕のない現状を変えようと奮起している。
- ③ 比奈は生活の安定や時間の自由を持っているが、自分にはそれがないことを強く意識し、羨ましさと同時に劣等感や焦りを感じている。
- ④ 比奈のように仕事をせずに趣味に没頭する生活を羨ましく感じるが、自分とは違う環境であるという事実を冷静に受け止めている。
- ⑤ 比奈が生活や時間に余裕があり、自分とは違う恵まれた環境にいることを素直に喜び、そのことを前向きにとらえて応援している。

問四 傍線部(2)「そんな雑念の中でも、講習会はおもしろかった」とあるが、この表現から読み取れる「僕」の心情として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 日々の仕事の疲れから現実逃避するため、講習会を気分転換の手段として受け止め、楽しく時間を過ごすようにしている。
- ② 講師の「ボランティアで」という言葉に感銘を受け、卑屈な考えを反省し、前向きな気持ちに切り替わろうとしている。
- ③ 講習会の内容が自分の夢である「店を持つ」ことに直結すると考えて、将来への希望を再確認し、意欲を高めている。
- ④ 鉢物という未知の世界に触れることで、一時的に比奈への思いや雑念から解放され、純粋な好奇心を刺激されている。
- ⑤ 比奈と一緒に過ごす時間が楽しく、講習会の内容は二の次であり、彼女の笑顔を見ることが一番の目的になっている。

問五 傍線部(3)「頭をもたげる」の「頭」と最も近い意味で使われているものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 感謝の意を込めて深々と頭を下げた。
- ② 体を動かして頭を切り替えよう。
- ③ 原稿の頭に日付を書いてください。
- ④ 外れないように釘の頭をしっかり打つ。
- ⑤ そのグループの頭は、気さくな人だ。

問六 傍線部(4)「少しきまり悪くなった」とあるが、そのように感じた理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 「起こす業」と大げさなことを考えているような風に口にしてしまったが、実際自分にはその力も覚悟もないという後ろめたさを感じたから。
- ② 起業の本を探しているにもかかわらず、知識がないことを見透かされ、「夢ばかりで現実を知らない」と思われていないか不安を覚えたから。
- ③ 小町さんが起業に詳しい専門家であると予想し、質問内容が的外れだったのではないかと感じたため、知識不足を恥じて気まずくなったから。
- ④ 実際には具体的な起業計画があるわけではないのに、本を探していることで「本気で起業を目指している人」と誤解されそうだったから。
- ⑤ 「起こす業」という言葉を使ったことで、大きな成功を狙っていると小町さんに気づかれて、自分の立場にそぐわない印象を与えたと後悔したから。

問七 傍線部(5)「あわてて言い訳をしなければいけないような気持ちになった」とあるが、そのような気持ちになった理由として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 繰り返された「いつか」には「夢が終わる」と予告するかのような確信に満ちた含みがあり、その言葉に対して反論をしなければならぬ気持ちに駆られたから。
- ② 「いつか」という一言に批判が込められていると過剰に受けとめ、自分が軽々しく夢を語ったことを責められているように思い、自己弁護の必要性を感じたから。
- ③ 「いつか」と感情の起伏を伴わず淡々と言われたことにより、励ましや共感を期待していた自分の思いが裏切られ、結果的に夢を笑われたような気分になったから。
- ④ 「いつか」という言い方に温かみがあり、励ましの裏に期待が込められていると感じて、その期待に応えるために夢に向かって自分自身を奮い立たせたかったから。
- ⑤ 「いつか」という語だけを取り出して繰り返されたことで、自分の夢が具体性を欠いていて現実的には実現困難だという弱点を浮き彫りにされたように感じたから。

問八 傍線部(6)「僕は言葉を失った」とあるが、この表現から読み取れる「僕」の状況として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 小町さんの発言は、「夢はかなえるべきものだ」という僕の価値観を真つ向から否定しているように聞こえたため、自分の考え方を揺さぶられたというより、むしろ拒絶されたような気がして、反論すべき言葉が出てこなくなった。
- ② 「夢は実現させなければ意味がない」と半ば当然のように思っていたが、小町さんの言葉はそれをやさしく覆すものであり、夢がかなわなくても価値があるという発想に触れたことで、頭の中の前提が揺らぎ、言葉が続かなくなった。
- ③ 小町さんの語り口は穏やかだったが、夢を「実現よりも保持するもの」とする考え方は、僕にとっては暗に「無理をするな」という忠告にも聞こえ、かなえようとしていた自分の気持ちを軽んじられたように感じ、何も言えなくなった。
- ④ 小町さんの「夢は見ているだけのほうが楽しい」という重みのある言葉に、これまで抱えてきた「会社を辞める不安」や「資金不足への恐れ」など現実的な課題を改めて突きつけられた気がして、すぐには返す言葉が見つからなかった。
- ⑤ 小町さんの「無計画な夢も悪くない」にはかすかな戸惑いが混じっていたため、自分が衝動的に夢を語ったことを恥ずかしく感じ、場違いなことを言ってしまったと自己意識が過剰に働き、どう返せばよいかわからなくなってしまう。

問九 空欄 X に入る語句として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 虚勢
- ② 一矢
- ③ 意表
- ④ 油断
- ⑤ 度肝

問十 傍線部(7)「それ以上何も訊いてはいけないような雰囲気になって、僕は紙と猫を持って去ろうとした」とあるが、この表現から読み取れる「僕」の状況として最も適切なものを、①～⑤より一つ選びなさい。

- ① 予想外に猫を渡されて、どう反応してよいかわからず戸惑ってしまい、なぜ話を続けてくれないのかという悲しい気持ちになったが、とにかく感情を抑えるために無言で従うしかなかった。
- ② 思いがけず本のリストや猫を手渡されたことに嬉しさを感じ、話を続けてみたいという思いもあったが、小町さんの独特な雰囲気を乱してしまうことを恐れて、会話を抑えてしまった。
- ③ 訊きたいことは沢山あったが、再び自分の世界に入ってしまった小町さんに、これ以上は自分で考えなさいと言われていたかのように思え、何も訊けなくなりその場を立ち去ろうとした。
- ④ 夢や将来の話が一段落し、自分の気持ちをある程度言葉にできたことで心に区切りがついたため、これ以上話を続けなくてもよいと感じ、安堵と小さな達成感のようなものを覚えていた。
- ⑤ 小町さんの態度や言葉にどこか距離や壁を感じて、自分が入り込む余地はないと悟り、これ以上話を続けても無駄だと思い、むしろ早くその場を離れたいという冷めた気持ちを抱いていた。

